



であります。「世界に開かれた海洋・文化都市」を理想の都市像として掲げ、プサン航路をはじめとしますさまざまな国際貿易の推進や、ロシア連邦ナホトカ市、中華人民共和国大連市等との姉妹・友好都市交流など、環日本海地域との交流の輪を広げ、環日本海時代における近畿圏日本海側の玄関口としての魅力と活力を高めることに鋭意努めております。また、現在本市では、21世紀の舞鶴のあるべき環境像を示し、それを実現するため、環境行政の大綱となるべき環境基本計画の策定作業を進めているところであります。

今日の環境問題は、地球温暖化をはじめとして、従来の手法では解決できない課題が山積いたしており、その発生原因は私たちの生活様式そのものに大きくかかわっておりますことから、その解決には多くの市民の参加を得て、計画がより実効性のあるものとなるよう努めてまいりたいと考えているところであります。

このような中、環日本海地域各国の環境問題に関する情報交換および政策対話の場として、環境協力のあり方等について議論を深める国際会議をここ舞鶴市で開催できますことは、本市が環日本海地域との連携協力をさらに推進し、また、市民と行政が一体となった環境施策を進めていくうえで大変意義深く、開催地としてまことに喜ばしく思っているところであります。

豊かで美しい環境を次の世代に引き継いでいくことは、現代に生きる私たちに与えられた大きな責務であります。私たちが生存していくためには持続可能な開発も必要であります。たった一つしかない宇宙船「地球号」に乗っている私たちは運命共同体であるといわれており、環境問題については地球的規模で考え、国際的な幅広い連携と協力の下、ともに行動する

ことが求められております。今回の会議において、地球環境に関しますさまざまな情報や意見の交換が活発に行われ、相互理解と協力関係がさらに強化されることを願ってやみません。

あとになりましたが、ご参加いただきました皆様にとりまして、舞鶴市での滞在が末永く心に残るものとなりますよう祈念いたしまして私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

江南 和幸（世話人代表）

ただいまご紹介いただきました江南でございます。環日本海アカデミック・フォーラム世話人代表ということで、一言ご挨拶いたします。本日の主催団体の1つの環日本海アカデミック・フォーラムというのは、初めて名前を聞かれる方もあるかと思しますので、少しだけご紹介をさせていただきます。

当フォーラムは京都府の提案により1995年秋に発足いたしました。以来、京都を中心とする日本全国の大学の研究者、最近では海外の会員の方も含めて、フォーラムの会員になっていただいています。さらに加えて自治体と各経済団体、企業のスタッフの方々が京都のフォーラムに相集いまして、日本海を取り巻く地域を巡る学術文化、産業経済、地域振興、およそこの3つに関しまして、あらゆる問題の研究会を開催する。それから、本日のような国際シンポジウムをすでに何回かやっています。また、環日本海地域の研究に関して京都府下の大学への研究助成など、発足わずか4年ではありますが、大変に中身の濃い活動をしております。

事業の1つに、3年前から始まりました環日本海講座があります。これは、大学コンソーシアム京都と共



同の事業でありまして、京都の大学に通う学生の皆様に我々フォーラムに集まる研究者の研究成果を広く公開しまして、若い学生の皆様に環日本海学というものに目覚めてもらおうという企画です。昨年と本年との2回にわたり、実は本日の主題になっております環境問題について、環日本海地域の政治と環境、環日本海地域の経済と環境という2つの課題を2年間続けて講義をいたしました。

どちらも夏の暑いさなかに集中講義をするわけですから。このごろの学生は、私たちが講義をしておりましても授業を受ける態度が大変あやふやで困ったものですが、この講義に限っていうと、大変に輝いた目を持った学生が多数詰めかけまして、おかげで講師陣も思わず時間を超過する。そうすると学生はブーイングをするのですが、この講義に関していえば、どんどん時間を超過するような大変に熱い講義が持たれました。これは、フォーラムに集まる先生方の大変ユニークな研究の魅力ということもあるのですが、やはり今日の環境問題が人類の存亡すら招きかねないということで、それに対する強い危機意識を学生が持っていることの表れかとも思います。

いわゆる地球環境問題というのは今に始まったことではなく、およそ1万年前に人類が農業を発明して自然を開拓したということに始まるわけですが、今日私たちが直面する環境問題というのは、人類の歴史から見ればごくわずか250年前の産業革命に始まる工業化が地球にもたらした負の遺産ではないかと思えます。

産業革命は同時にヨーロッパに資本主義を花開かせるわけですが、この資本主義は、ご存じのようにひたすら富を求める道をまい進することをその生命としております。富の希求の行きつくところは物心崇拜フェチシズムであるということは経済学で教えるところですが、まことに今日の市場原理万能の経済学、勝者の経済学という流行は、ほとんどこの予言の正しさをそのまま実行しているかのようには思われます。

物心崇拜の向こうというのは、ギリシャ神話のミダス王の故事にならうと、命の死に絶えたきらきらと黄金色に輝く地球ということになるのかもしれませんが。250年の工業化がもたらした負の遺産、身近なところでは1960年代日本を襲った公害、今日もなお続く国土の破壊、国境を超えて、日本海を超えて行き交う工業

汚染、地球の温暖化、酸性雨などなどであります。

しかし、これらの環境問題はどれ一つ取っても、旧来の経済原理ではどうも生きていけそうにないということ強く示唆していると私には思われてなりません。ただし、それでは私自身が新しい経済原理を見つけたかという決してそうではありません。ぜひ、このシンポジウムで新しい我々の生き方を見つけていただきたいと願ってやみません。

私は龍谷大学という仏教の教えをよりどころとする大学に勤務しております。私自身は理工学部で金属材料工学が専門です。ある意味では大変に環境を乱す産業のもとになる学問をやっております。もとより仏教者ではありませんが、日本のことわざで「門前の小僧習わぬ経を読む」というのがありますので、少し仏教の言葉を覚えました。それが実は大変に環境に関係があるのでちょっと紹介させていただきたいと思えます。

今日、環境問題を解くキーワードとして「共生」という言葉があります。これは英語にもなっておりますので、大変広く皆様の耳にも入っている言葉だと思っております。実はもともとは仏教用語なのです。最初にこの言葉が生まれたもとは、中国の唐時代の高僧に善導大師という方がいらっしゃいましたが、その方が『往生礼讃偈』という著書を著しまして、そこに「願わくばもろもろの衆生とともに安楽国に往生せん」ということを言っております。この「ともに往生せん」から、仏教ではこれを「ともいき」と読んで、「共生」という言葉がそこから生まれたと伺っております。

日本海を渡った仏教は比叡山の僧たちにより、日本流に解釈されて、「草木国土ことごとく皆成仏す(草木国土悉皆成仏)」という日本語にこれを直します。「成仏」というのは仏になるということではなく、現代流に解釈すれば命を全うするということですので、やはり、これも我々が今日広く理解する「共生」ということを表していると私は思っております。

では、この「共生」というのは仏教者の専売特許かというところではありません。日本海に直面する一つの国、古くからキリスト教の国であるロシアでも同じ思いを吐露する人がおりました。『復活』という大変に有名な小説で、最後にキリストの福音をうたったトルストイがその人です。トルストイは、晩年、日本の白樺派との交流を深めて深く東洋思想に傾斜するので

すが、福沢諭吉が脱亜入欧を説いて今日の日本の農業国から工業国への転換の思想的先導を行ったのとは全く逆に、脱欧入亜という夢を見たということがいわれております。彼は人と自然との関係において、今日なお示唆に富む次のような言葉を残しております。「幸福の第一の、そして広く認められている条件とは、人間と自然との関係を乱すことのない生活、すなわち広い天空の下、太陽と新鮮な空気の下、大地と草木と生き物とともにある生活を送ることである」というものであります。

これもまた、今日でいう共生の思想にほかなりません。むろん環境問題の実際的解決方法はこれまで皆様言われたように、哲学的論議ではなく、実務的な実際的な議論が不可欠で今日のシンポジウムがあると思われませんが、しかしながら議論の出発点にあたって、日本海をはさんで相対する3つの国の賢人たちが図らずも人類と自然との共生の思想を共有したという事実を、ぜひ本日のシンポジウムにご参加の皆様の心の隅にとめていただきたくご紹介させていただきました。

本日のシンポジウムが実り多いものとなるようお願い次第であります。これでご挨拶を終わります。ありがとうございました。